

埋文 とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2013.3.20

VOL

122



きゅっとくびれたおしゃれな台付きの甕。安定感もあり、食卓が華やかに彩られるようだ。口径15cm・器高18cmの大きさであるが、洋酒用グラスの先祖なのかと思うくらいキュートな形だ。おいしいお酒やスープを入れ、この土器を囲んで大勢で食事をしたのだろうか。お祝いの席や客人をもてなすのにもってこいだ。

上市町江上A遺跡出土

とっておき埋文講座 ● 特別展「寧楽と越」記念講演

埋文あらかると ● 「埋文とやま」創刊30周年／ふれる・学ぶ・体験する

Center Flash ● 催しガイド2013

行ってこれよ ● 立山カルデラ砂防博物館

富山県埋蔵文化財センター

大伴家持が《越》で見たもの ―異なる「風土」への驚き―

高岡市万葉歴史館 総括研究員 新谷 秀夫氏

とおき埋文講座

はじめに

今日は、家持が越中に赴任した5年間で、何をどう見たのか、《越》をどのように思っていたのかについて話をさせていただきます。副題である「異なる『風土』への驚き」が、今日の話の結論になると思います。

《越》にかかる枕詞

《越》にかかる枕詞には「しなざかる」と「み雪降る」の2つがあります。天平19(747)年、家持が病気になるって死にかけたときに部下の池主に贈った歌(巻17・3969)の中で「しなざかる越」が出てきます。越中国庁で働く役人たちをねぎらった宴会で詠んだ歌(巻18・4071)や家持が都を離れるときに詠んだ歌(巻19・4250)にも「しなざかる越」が出てきます。4250番歌は、5年間越中に住み続けて、都に帰るのは名残惜しいという意味の歌ですが、家持の歌として「しなざかる越」は合計4つ出てきます。一方、「み雪降る」という枕詞は巻17・4011、巻18・4113に出てきます。つまり、《越》という言葉飾るのに2つの枕詞を使い分けているのです。「しなざかる越」は5例あり、4例は家持が使っていて、あと1つは家持の

叔母で、義理の母であり、家持を育てたであろうと思われる坂上郎女(さかのうえのいらつめ)が使っています。ほとんど家持しか使っていないことから、家持が創り出した言葉と考えられています。万葉集に多く見られる「天ざかる鄙」を参考にして、よく似た意味の表現として「しなざかる越」を創ったと考えられます。どういう意味か、はっきりした結論は出ていませんが、「しな」は層とか階段・坂などを表す言葉です。そして、「さかる」は「隔てる」の意味。ですから、階段のように幾重にも重なる山を越えて、遠く隔てられた「越」。都から遠く隔たっているという意味で「しなざかる越」と家持は言っているのです。

一方、「み雪降る」という表現は、雪が降っているという実景による枕詞です。家持は2回しか使っていませんが、「み雪降る越」は「天ざかる鄙」とともに使われます。「天ざかる鄙」は天皇の住む都から距離が遠いことを言う表現なのですが、地元の人を前にしていない時に家持は「天ざかる鄙」という表現を使います。「天ざかる鄙」は「ど田舎」という意味で、人も住まない田舎が「天ざかる鄙」。都から遠いという距離だけでなく、精神的にも都から離れているという隔絶感を表しています。越中は田舎で、自分が本来来るべき場所ではないと思っていた



本音を、家持は越中の人の前では吐きませんでした。家持は「天ざかる鄙」を越中赴任直後に歌の中で使っていますが、気の許せる部下に諷められたのか、それ以後は使いません。ただ、家持が病気になるって気が弱くなったときや気の許せる部下に対してだけは使っています。これが家持のすごさです。その代わり、家持は「しなざかる」という枕詞を生み出しました。距離が遠いという意味だけを特化した妥協案で「しなざかる越」を創り出したのです。心の中では「天ざかる鄙」と思っているながらも、「しなざかる越」と歌った家持。表向きの顔は「しなざかる越」で、つらぬいていたのでした。

家持の「越中」に対する意識

それでは家持は、心の中で《越》をどう思っていたのでしょうか。家持は歌に説明をつけるくらいまじめな人でしたので、歌の中でたまにぼろっと本音が出る時がありました。越中万葉に出てくる表現に「大君の任けのまにまに」という言葉があります。これは、家持のオリジナルに近い言葉で、越中へ来た家持の思いを表しています。「大君の任けのまにまに」は、家持の、天皇の代弁者だという自覚をもった能動的な精神のあらわれで、家持の表の顔を示しています。「われこそが天皇に代わって越中

を治めにきたんだぞ」という家持の思いを表しています。一方、病気後の家持が、奥さんへの本心を詠んだ「恋緒を述べる歌」の中で、たった一度だけ家持は「大君の命恐み(みことかしこみ)」という表現を使います。これは、「天皇の命令だからしかたなく(行きますよ。)」という受動的な意識の表れなので、この「大君の命恐み」にこそ、家持の本音が垣間見えてくるのです。「しなざかる越」と言いながら「天ざかる鄙」と歌う本音、「大君の任けのまにまに」と歌いながら「大君の命恐み」と歌う本音。家持は、使い分けをしっかりと区別していたのです。まじめなので、言わないようにしてきたのに、気が弱くなった時や病気になった時に、本音がぼろっと出たのです。

越中の「風土」を自覚する家持

天平18年(746年)8月、歓迎会の折りに部下たちとともに「渋谿(しぶたに)」の「清き磯廻(いそみ)」を見に出かけました。「渋谿」は、現在の雨晴海岸にあたります。海の向こうに、立山連峰が見える絶景の地です。ところが、家持はその立山を歌いません。何を見に来たかということ、寄せる波でした。平城京で育った家持にとっては海の方が珍しかったのです。ただ、越中の名勝地として「渋谿」がいちばん最初に登場します(巻17・3954)。

同じ天平18年、家持にとって初めて迎えた越中の冬の歌があります。急に雪が降り出してあっという間に地面に30cm。家持は、越中に来るまでは、ほとんど平城京周辺で過ごしています。平城京では大雪といっても数cm。越中でのあっという間の30cmの積雪は

珍しく、驚いたにちがいありません。それから、天平19年の夏に詠んだ歌のなかに「立夏」に関わる歌があります。家持は、ほととぎすは立夏の日(現在の5月初旬)に鳴くのが当たり前と思っていました。ところが、立夏の日になっても越中ではほととぎすが鳴きません。現在も、奈良県のほととぎすの初鳴きは90%以上立夏の日だそうです。そこで、家持は恨みを込めてほととぎすを待ち望む歌(巻17・3983)を詠みました。

この立夏の日の歌から、家持は、越中の「風土」を強く意識しはじめます。いかに都と越中が違うか。その違いを、ほととぎすをきっかけに感じはじめたのです。そして、その直後、「二上山の賦」を詠み

ました。ほととぎすは、越中で1カ月遅れに鳴きはじめました。家持はほととぎすが大好きで、ほととぎすの歌をたくさん詠んでいます。家持は「二上山の賦」のあと、ものすごく集中して歌を詠んでいきます。

家持が驚嘆した越中の「風土」

この賦の発表先は、越中でなく都でした。この歌を詠んだのは、越中の自然を知らしめようという気持ちの表れです。まず、天平19年3月30日(現在の暦で5月17日)に「二上山の賦」(巻17・3987)、その1か月後に「布勢の水海に遊覧する賦」(巻17・3992)、さらに3日後に「立山(たちやま)の賦」(巻17・4001)を詠みました。これを「越中三賦」と呼んでいます。越中最

初の大作です。二上山や立山の説明が入っているので、発表先が都であったことは明白です。その後、天平20年春の越中国内巡行の時の歌や越中時代の代表作「越中秀吟」など、じつに多くの歌を家持は残しました。

越中に赴任した5年間で詠んだ歌は、家持の歌全体の約6割にあたります。越中に在任中、通常の4倍のペースで歌を残しています。家持は、「異なる風土」、つまり、越中が都といかに違



うかということに目を向け、その驚きや、越中のすばらしさ、風土の良さを、常に都を意識しつつ、5年間歌い続けていました。家持は、単純に歌を中心とした日記を付けていたわけではなく、だれかに見せようと意図的に歌をまとめていたのです。都とは異なる「風土」の越中に驚嘆し、記録していった中で、越中での5年間の務めをうまく乗り越えることができたのでしょう。

家持は、越中を去るときに、都へ帰りたくないという気持ちを込めた歌を詠んでいます。でも、けっして、越中での5年間を楽しく過ごしたわけではないと思われます。公の場では、最後まで建前を通した家持でした。

おわりに

今日は、考古学とは別の分野から、家持の詠んだ歌を通して話をいたしました。万葉の世界を楽しんでいただけたでしょうか。家持や万葉集についてさらに知りたいと思われる方は、万葉歴史館にお越しいただければ幸いです。

巻17	3969	大君の任けのまにまに	しなざかる	越を治めに	出でて来しますら我すら	世の中の	常しなれば...
巻17	4011	大君の	遠の朝廷そ	み雪降る	越と名に負へる	天ざかる鄙にしあれば...	
巻18	4071	しなざかる	越の君らと	かくしこそ	柳かづらき	楽しく遊ばめ	
巻18	4113	大君の	遠の朝廷と	任きたまふ	官のまにま	み雪降る越に下り来...	
巻19	4154	あしひきの	山坂越えて	行き変はる	年の緒長く	しなざかる越にし住めば...	
巻19	4250	しなざかる	越に五年	住み住みて	立ち別れま	惜しき宵かも	

巻17	3954	馬並めて	いざうち行かな	渋谿の	清き磯廻に	寄する波見に
巻17	3983	あしひきの	山も近きを	ほととぎす	月立つまでに	なにか来鳴かぬ
巻17	3987	玉くしげ	二上山に	鳴く鳥の	声の恋しき	時は来にけり
巻17	3988	ぬばたまの	月に向かひて	ほととぎす	鳴く音遙けれ	里遠みかも
巻17	3992	布勢の海の	沖つ白波	あり通ひ	いや年のには	見つつしのはむ
巻17	4001	立山に	降り置ける雪を	常夏に	見れども飽かず	神からならし

埋文 あらがると

はじめに

一昨年の年末、大掃除を兼ねた書類の整理中、ふと目にした書類から24年度に「埋文とやま」が創刊30周年を迎えることに気付きました。それと同時に埋文とやまの記事目録も無い事に気づき、年明け早々から暇を見つけて記事目録の作成を始めました。

亥年の昭和58年1月に創刊した「埋文とやま」は広報誌としてはもちろんのこと、遺跡・遺物について要点をコンパクトにまとめているため、展示や講演などのネタ元として所員が利用することも多く、記事目録があれば何かと便利になります。

歩みのグラフ

目録はしばらくして完成しました。

この30年に掲載された記事の総数は本号を含めて1,018本ありました。掲載記事の題名を見るだけでも、当センターの歩みが表れています。今回は、私の若干の独断と偏見を交え、この流れを皆さんと見ていきたいと思っています。

目録のままでは分かりにくいので、グラフにしました。記事を12種類に

大分類	小分類	
埋文行政	①	埋文行政
	②	埋文行政統計資料
調査・研究	③	遺跡紹介
	④	遺物紹介
	⑤	研究活動
	⑥	調査事業
	⑦	普及活動
展示・普及	⑧	展示事業
	⑨	講演会
	⑩	センター施設
	⑪	センター外施設
その他	⑫	その他

表1 「埋文とやま」記事分類

「埋文とやま」の30年 ー継続は力なりー

分類し(小分類)、それらを当センター事業である次の3つの分類(大分類)にまとめ、色分けしました。

- (1) 埋文行政機関(開発と文化財保護の調整)
- (2) 調査・研究機関
- (3) 展示・普及機関(博物館)

横軸は年度、縦軸は各分類の%です。グラフの下には連載記事推移と備考欄に関連事項を記載しました。

埋文行政機関

創刊時の昭和50年代後半は富山県内では北陸自動車道や太閤山ランドなど大型開発事業が行われた頃です。

「埋文とやま」でもこれらを反映し、埋文行政的な記事が全体の4割を超え、調査した遺跡等の紹介記事が3割を占めます。展示・普及関係は2割程度ありますが、そのほとんどが組織紹介で、展示・普及活動については1割もありません。創刊時の当センターは開発側と遺跡保護について調整と調査を行なう行政機関として“猪突猛進”していたことが伺えます。

調査・研究の割合が最も高いのが平成4年の約6割です。平成に入りバブル経済の影響と、それに続く東海北陸道や能越道、園場整備等の“第2の大型開発事業”の頃と言えます。平成元年には大型開発事業に対応するため財団の調査組織が発足しました。現在の埋蔵文化財調査事務所です。県内の調査件数のピークは平成8年にあり、それ以降は減少傾向にあります。

考古博物館へと脱皮

埋文行政の記事は年々減少し、平成11年には無くなります。これと前後して「埋文とやま」も構成内容が見直され、新しい連載がスタートします。平成12年には「埋文とやま」もデザイン



埋文とやま創刊号

が一新され、フルカラー印刷となり、現在のスタイルになりました。

このあたりが、当センターが行政機関から博物館へ軸足が移った時期、“画期”と言えるでしょう。その後、考古体験広場の整備や土日開館、「まいぶん友の会」の設立など博物館としての機能の充実が図られます。

センター施設紹介(⑩)の要素でもこの“画期”は見てとれます。創刊時に施設紹介記事が掲載されていることは先に触れましたが、その後、断続的に昭和62年度・平成9・11・12・14～16・19、そして、今年度にも見られます。昭和62年は新館の竣工、平成9年が設立20周年、それ以降は博物館へと脱皮するため、考古体験広場竣工などの施設改修や土日開館などの体制を改めた年度に当たります。今年度は4月にオープンした国重文展示可能な展示室・収蔵展示室の施設紹介です。

蛇足ですが、目録作成に当たり執筆者の項目も設けました。当然、職員の執筆回数も分かります。差しさわりがあるためここでは詳しく述べませんが、最も多かったのはY氏で、断トツの31回でした。さすがです。

全国4位

30年を駆け足で見えてきました。「埋文とやま」の記事の移り変わりは、当センターの歩みを映す鏡と言ってよいでしょう。ところで、ここまで書いて



埋文とやま最新号

「埋文とやま」が全国的にはどの様な位置にあるかと言う疑問が湧いてきました。そこで、他の都道府県埋文センターの広報誌について、インターネットを基本に、一部電話での聞き取りを交え状況調査を行ないました。その結果、全国の都道府県の埋文センター等施設で広報誌を発行しているのが約7割、最も長く続いているのは、昭和55年創刊の(財)広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室の「ひろしまの歴史」で、次が昭和56年創刊の(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの「京都埋蔵文化財情報」と(財)岩手県埋蔵文化財センターの「わらびて」でした。我が「埋文とやま」はこれに続き4番目でした。

継続は力なり

今回、色々調べてみて「埋文とやま」の刊行は“継続は力なり”を体現していると思います。他県の状況を調べた際、組織改編等で広報誌を休刊したと

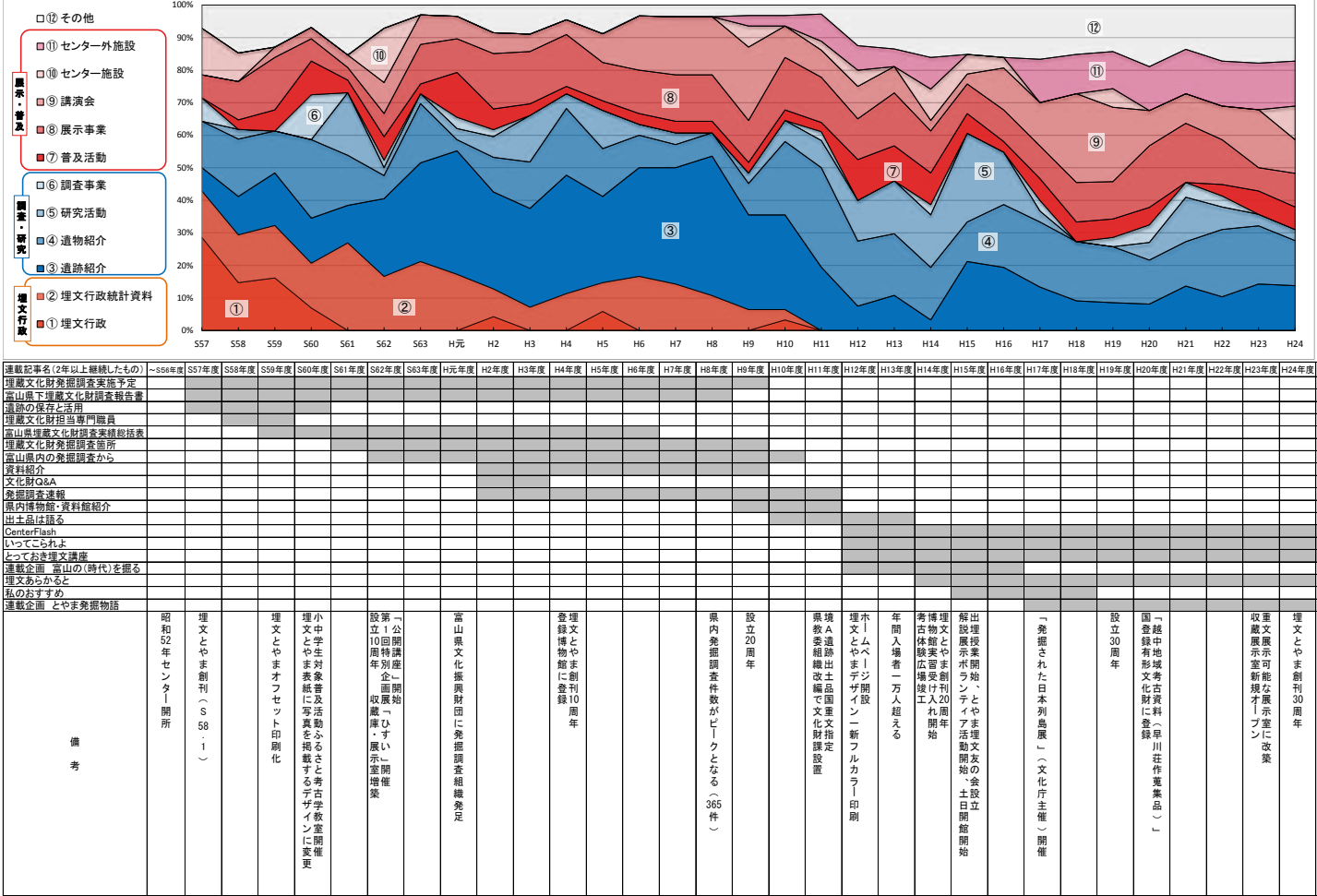
いう事例がいくつもありました。それぞれの理由はあるかと思います。しかし、小さな広報誌といえども年4回・30年も続けるには大変な労力が必要です。

折角作った目録です。一般にも広く活用して頂くため4月からホームページでの公開を考えています。特定の遺跡の紹介記事の検索など使い方は色々あるかと思います。もし、目録を見て読みたい記事があればご一報願います。

「埋文とやま」は、次号から31年目に入ります。今年は巳年、これからも「埋文とやま」を細く長く続けていきたいと思っています。10年後、40周年に、この後の動向について書ければ幸いです。その時の当センターはどんな風に脱皮しているのでしょうか。その変貌が今から楽しみです。

(高梨 清志)

「埋文とやま」年度別掲載記事の推移



埋文 あらかると

はじめに

当センターでは、主に小・中学生を対象に「出前授業」と「来館学習」を行っています。実施にあたっては、地域の歴史や埋蔵文化財についての興味をもってもらうためにスタッフ一同知恵をしばり、さまざまな工夫をしています。

今年度は、電子黒板などのICT機器の導入をはじめとして、県内各地域の出土品を集めた「ふれる出土品標本箱 タッチThe Doki」などを用意し、より考古学に親しんでもらえるようにしました。



電子黒板による出土品解説

1 出土品にふれる

当センターでは、出土品の使用法や特徴について今年度から電子黒板を使用しています。これまでは口頭でのみの説明でしたが、電子黒板で土器の文様を拡大して見せたり、使用しているようすを想像図で紹介したりと、出土品についてより分かりやすく解説できるようになりました。また、解説の途中に出土品の用途を当てるクイズを出題するなど、こどもたちが参加する活動も取り入れ、より興味をもてるようにしました。すると、以前は出土品を手にとって観察するだけの活動だったのが、今では石斧^{せきふ}を握り、使う動作をしてみたり、くぼみ石にくるみをのせて動かないことを確かめたりと、より有意義な活動になりました。



出土品にふれる

2 歴史を学ぶ

新たな取り組みとして、今年度設置した収蔵展示室に、時代ごとのジオラマ、土器パズルなどを常設し、いつでも見学や体験ができるようにしました。また、富山県歴史年表では、県内の歴史を日本や世界の歴史と見比べることができるだけでなく、県内の史跡も知ることができるようになっています。

こども向けの書籍もたくさん用意し、こどもから大人まで楽しんでもらえる内容になっています。ぜひ、ご家族で歴史を学びに来てください。



富山県歴史年表

3 先人の技を体験する

まずは「火起こし」です。当センターでは多数の道具を用意し、多くの来館があっても、同時に実施できるように準備しています。今年度も体験学習で、ほとんどのこどもたちが「火起こし」に挑戦しました。初めての体験で、炎が上がった時の喜びよう、きつと縄文時

代のこどもたちと同じ感動ができたのではないのでしょうか。

もうひとつは「勾玉づくり」です。現在の道具は使わず、石に竹串で孔(あな)を開け、自然石に擦りつけて削り、勾玉の形に仕上げていきます。作成中の真剣な表情、磨いている時の目の輝き、作り上げて首にかけるときの嬉しそうなようす。先人の技を体験することで、自然に先人の心にふれる活動になっていたように思います。



火起こし

終わりに

「本物の出土品にさわったのは2度目です。今回は昔の人がどのように使っていたか想像しながらさわりました。」「ぼくの学校の近くに18か所の遺跡があると教えてもらいました。数が多くておどろきました。」「電子黒板での説明が分かりやすくて、歴史をとて身近に感じることができました。土器パズルも楽しかったです。」「ジオラマを見て、古代の人がどんな生活していたのかよく分かりました。」「火起こしでは、炎が上がったときすごうれしかったです。」「最後の校外学習で作った勾玉を見せ合って、とてもいい思い出になりました。」

今年度こどもたちから寄せられた感想です。今後も、1人でも多くのこどもたちが当センターで「ふれる・学ぶ・体験する」活動をして、何かしら感じてもらえればと思っています。

(松田 博昭)

Center Flash

催しガイド 2013

企画展

古代へのとびら2013

— 速報展 —

平成25年 4月11日(木)～
9月19日(木)

最新の発掘調査による富山県内の遺跡からの出土品を通して、地域の歴史や文化を紹介します。また、夏休み期間中を中心に「わくわく体験コーナー」を設置します。



早月上野遺跡の出土品

特別展

わざわいが遺した歴史

平成25年 10月2日(水)～
12月5日(木)

地震や津波、洪水など文献に残された災害以外にも古くから多くの災害が発生したことが推察されており、遺跡にはこうした歴史に埋もれた災害の痕跡が多く発見されています。本展示では、遺跡に残された災害の歴史を振り返り、災害に立ち向かった先人の苦労と知恵をさぐっていきます。



地震墳砂に切られた井戸

企画展

古墳時代のとやま

平成25年 12月16日(月)～
平成26年 3月27日(木)

県内で発掘された古墳時代の集落及び古墳の出土品や写真パネル等を展示し、県内の古墳時代の社会の様子や文化を紹介します。



富山市王塚古墳(前方後方墳)

県民考古学講座

考古学の入門編から近年の発掘調査成果まで、当センター職員を中心に著名な講師も交え、わかりやすく解説する講座です。

平成25年度は6月2日(日)に第1回目を予定しています。詳細は、4月中旬からセンターの窓口やホームページでお知らせします。



ミニ考古学博物館

当センター職員が県内の遺物や古代体験キットを持って公民館等の施設を訪れます。出土品に触れながら話を聞いたり、古代のものづくりを体験することができます。

- 開催日／10月～2月の
土日の希望日
- 対 象／小中学生及び一般



ふるさと考古学教室

親子で楽しく古代体験をしながら学べる考古学教室です。ガラス玉づくりや土器づくりなどの体験を通して、先人の知恵や技にせまります。

- 開催日／7月25日
7月29日～8月2日
8月6日、7日
- 対 象／小学校4・5・6年生と
その保護者、中学生



こども考古学クラブ

火起こし、勾玉づくり、組紐など古代の技術を習得する養成講座です。技術を習得した子どもたちに「マスター」号を授与します。

- 開催日／8月12日～
8月29日
- 対 象／小学6年生及び中学生



行ってこられよ —《52》

今度の休日、ちょっと出かけてみませんか。



立山カルデラ砂防博物館 中新川郡立山町芦峯寺字ブナ坂68

立山カルデラ砂防博物館は、「立山カルデラの雄大な自然と歴史」「富山平野を土砂災害から守るための砂防のしくみ」を大きなテーマとし、立山カルデラの自然や、砂防の歴史と現状について紹介しています。常設展示は、立山カルデラ展示室からSABO展示室へ「崩れる」→「流れる」→「防ぐ」→「創る」→「伝える」というストーリーで構成され、砂防の現在に至るまでの歴史をビジュアルに捉えることができます。

この博物館の一押しは、何と言っても大型ジオラマと立体映像です。映像から映し出される立山カルデラの雄大な景観が来館者を魅了するだけでなく、砂防の成り立ちやしくみなどが理解しやすいよう、様々な工夫がなされています。安政の大災害シアターやトロッコ列車の実車展示、防災シュミレーションゲームなどもあり、一般の方だけでなく、小中学生も楽しみながら学ぶことができます。

開館時間 9時30分～17時(入館は16時30分まで)

※ゴールデンウィーク・夏季期間は、8時30分開館

休 館 日 月曜日(祝日の場合は開館)

祝日の翌日(土・日曜日の場合開館)

年末年始(12月28日～1月4日)

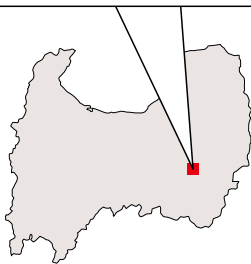
※ゴールデンウィーク・夏季期間無休。

※臨時開館・臨時休館の詳細は、博物館ホームページに掲載。

料金個人 一般400円、大学生320円、高校生以下無料

駐 車 場 有

電話番号 076-481-1160



■ 電車を利用する場合

富山地方鉄道「立山」駅から徒歩1分

■ 車を利用する場合

富山市内から約1時間

北陸自動車道「立山IC」から車で約40分、「富山IC」から約45分

編集後記

あちこちで草木が芽吹き、春の訪れを感じさせる今日この頃です。当センターが位置する呉羽山丘陵の桜の開花も間近でしょう。呉羽山の頂上からは、富山平野を一望することもできます。4月11日より企画展「古代へのとびら 2013—速報展—」が始まります。呉羽山の散策がてら、ぜひご来館ください。

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」vol.122

平成25年3月20日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL 076-434-2814

URL <http://www.pref.toyama.jp/branches/3041/3041.htm>

